
1 秒間の出来事。

弑死無羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1 秒間の出来事。

【Nコード】

N 8 9 7 2 A

【作者名】

弐死無羅

【あらすじ】

あの日、父が死んでから一年が経とうとしていた。少年は死んだ父に想いを届けるコトができるのだろうか！？作者的に1番傑作な短編登場

（前書き）

俺的にまあまあ楽しんで頂けるストーリーに仕上げました!! どうぞご覧あれ!!

去年の12月15日、俺の親父はがんでこの世を去った。

俺は親父の死を見届ける事が出来なかった。
いや、見届けようとはしなかった。

その頃俺は親父と大喧嘩して、家を出て友達の家で泊まっていた。
その後親父が倒れたとお袋から連絡があったが、俺は見舞いに行こうとはしなかった。

そして気付いたら親父の葬式に俺が出ていた。
あんなにうるさかった奴が今は何も喋ろうとも、ましてピクリともしない。その時、やっと親父が死んだ事を実感した。

だが俺は気付くのが遅すぎた。

その日以来俺の心にポツカリとでっけえ穴が空いて、高校を卒業してフリーターとなった今も、人と接触するのを拒んできた。

何もかも原因は自分にあった。

俺はその頃、まだ高3ですっげえグレてて親には迷惑かけっぱなしだった。

いや、今までもそうだった。ゲーセンやデパート、あるいは街中、と至る所で警察沙汰になるような事もたくさんした。毎日親に迷惑かけてた俺。

だが今はツルんでいた奴とも縁を切り、普通に生きようと努力しかけていた。

多分、親父の死が俺を変えたのだろう。

だが去年の12月15日以来、俺の心は冷めきってしまったのだ。何をするにもやる気が起きなかった。

俺は何年かけても親父に詫びたかった。

だが、もう今となっては手遅れだった。

何で、もっともっと早く気付けなかったんだろう。

自分に対する罪悪感や憎悪感、そして殺意までもが極限まで増してくる。

俺はどうしても親父に謝りたかった。

12月。

もう親父が死んで1年が経とうとしていた。

自分の部屋のベッドでボーっとしていた俺に一通のメールが届いた。

冷たい人間となった俺に、メールが入るなど珍しかった。

ましてや電話など一切なかった。

そのメールの文章が書いてあるケータイの画面の中に、俺はくぎづけになった。

『神田くん？元気にしてるかな？上坂真理だけど、覚えてくれてるよね？』

（ああ覚えてる。高校の時の同級生で、高3の時に同じクラスだった。グレてた俺に唯一温かく接してくれた女子だ。勉強はすごくできくせにこんな俺に温かく接してくれる彼女が、俺は好きだったが、親父が死んで彼女とは音信不通となってしまうっていた）

私、友達から噂で聞いたから確かかどうかはわからないけど、“死後366日の1秒間の黄泉還り”っていう現象があるらしいんだ。

（何だ？それは？四十九日や七七日は聞いた事はあるがそんな言葉は初耳だ）

友達が言うにはね、“うるう年の前の年に死んだ人間が、その次の年のちょうど同じ時間に死んだ場所で1回だけ1秒間だけ蘇る”んだって！説によるとうるう年によって1日が増えて、現実と天国との境界に歪みができるらしいの！その瞬間に死者と生者の想い合う魂が交差するんだって！その1秒間っていうのも実際はもっと長く感じるらしくって。でも本当にこの現象が起こるかはわかんないんだ。ただ、神田くんの力になってあげたくて…」

メールを読み終わると止まっていた心臓の鼓動が、一気に動き出した。

無性に俺は、上坂にお礼を言いたくなった。

まさか…。

もしこの話が本当なら。いや、やってみる価値はある。

そして俺は上坂に電話を掛けることにしたのだった。

上坂の話によると、現象を遭遇するには俺が親父の死んだ病院で、さらにその病院の中の、どこの号室で、その号室の中のどこのベッドで何時分何秒に息を引き取ったのか知っておく事が第一条件として必要だった。

お袋や、病院の人に聞き込み調べた結果、親父は原田病院の個室の203号室のベッドで早朝の5時12分47秒に息を引き取ったらしい事がわかった。

これで準備が整った。

あとは運命の時間まで待つだけであつた。

運命の日当日。

前日緊張と不安が混じりあつて眠れずにいた。

上坂にも付き添いに来てもらおうか迷ったが、俺は一人で行く事を決心した。

原田病院には前から訳を説明して、俺の親父を担当したお医者さんから『少しでも君の支えになれるなら』と了承を得ていた。

203号室に電気を付けると、殺風景な世界が広がった。

ここで親父は…。

俺は考えるだけで胸が痛み張り裂けそうになっていくのを感じていた。

刻一刻と秒針が近づいてくうちにその胸の痛みはひどくなっていった。

そして俺は親父が寝ていたベッドに横になった。

今考えると、不思議な光景だ。

親父が死んだ場所でわざと寝てるなんて。

時間はあと5分を切っていた。

あの時言えなかったコトを、ちゃんと親父に言わなければ…。
そして俺は目を閉じた。

5分が経過したのだろうか…。
俺は目を開け辺りを見回した。

やはり…デマだったか。

起き上がろうとした次の瞬間、めまいに襲われてしまったのだった。

…目を覚ますと、俺は周りには芝生しか広がっていない場所に立っていた。

俺はこの場所に見覚えがあった。

すると、俺はすぐ後ろに気配を感じたのだ。

振り返るとそこには…。

自分の父がいた。

親父がいるのに俺は話し出せないでいた。

『まさかまたこんな形でお前と会うとはな。お前も靖子も元気にし
とるか?』

先に口を開いたのは親父だった。

靖子とはお袋の事だ。

その言葉に、俺の親父が死んで以来我慢してきた涙が溢れ出した。

『お、親父ごめん。小さい頃から迷惑ばかりかけて。本当に…本
当に ごめん』

俺は目から流れるしずくをぬぐいながら言った。
それはまるでちっちゃな子供みだった。

『ああ。俺はもうお前を説教したり、褒めてやる事もできん。だが
な、いつでも俺がお前の側にいる。悲しい時、辛い時には俺がお前
の側にいる事を思い出せ。そしてこれからは、立派な大人として生
きていってくれ』と、親父は泣くのを必死にこらえながら俺に言っ
た。

『親父…。こんな俺を育ててくれて、ありがとう』
俺は泣きながらお礼を言った。

とうとう親父の目からはしずくが垂れていた。

『ここがどこか…覚えてるか？ここはお前がちっさい頃によく来た場所だ。ここでお前とよく遊んだな』

父の言葉で、俺はこの場所を思い出した。俺は小さい頃、ここが好きでよく走ってはよく転んでいた。

『ああ。覚えてるよ。あの時はとても楽しかった』

俺は小さかった頃の事を思い出していた。

そして親父は『今度はお前がお守りとして持っておけ。俺はそいつのおかげで充分生かさせてもらった』と言って俺に何かを渡した。それは…。

クマのキーホルダー。

一回だけ、小さい頃にも親父が入院した事があった。
その時にお守りとして渡したのがこのキーホルダーだったのだ。『大事に…してくれてたんだ』

俺の涙はまたドツと溢れ出した。

『当たり前だろ。お前にもらった大切な宝物なんだから』

と親父は泣きながらも笑ってそう言った。

こんな時間がもつと続いてくれると信じていた。

だが別れは突然来た。

自分達の周りの地面が消滅し始めたのだ。

『もうそろそろお別れだな』

親父は笑って言ったが、悲しさをこらえているのがわかった。

俺は親父を強く抱きしめて泣いた。

『親父。俺これからは立派な大人になるから』

『ああ。立派な大人になるのはいいが、死に急ぐなよ。俺みたいに
な』

親父は強く俺の背中を叩いた。

『うん。親父よりは長生きしてやるからよ』

『頑張れよ、正広』

そして2人を繋ぎ止める空間は消滅した。

目覚めるとまだ外は暗かった。アレはたったほんの1秒間の出来事だったんだから無理はない。

俺はすぐやる気で溢れていた。
後で上坂にも連絡を入れよう。

俺は右手に目をやった。

そこには『クマのキーホルダー』があった。

（後書き）

どうだったでしょうか？この小説を読んで何か感じた事があればコメントなどメッセージでよろしいので待っています>（――）<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8972a/>

1 秒間の出来事。

2010年10月10日23時28分発行